

**鳥取県アレルギー疾患実態調査
概要版**

平成 31 年 3 月

鳥取県福祉保健部健康医療局健康政策課

■ 調査の概要

1 調査目的

県内保育所・幼稚園(以下「園」という。)及び小・中学校におけるアレルギー疾患を有する児の実態を明らかにし、今後の本県におけるアレルギー疾患対策の基礎資料とする。

2 調査対象

- (1)保護者調査:乳幼児・学童(小学校全学年)・生徒(中学校全学年)の保護者
- (2)施設調査:上記(1)の所属する園の管理者及び小・中学校の養護教諭

3 調査方法

無記名による自記式調査票の配布(郵送)

4 調査期間

平成30年2月7日(水)～平成30年3月23日(金)

5 回答状況

- (1)保護者調査:保育所・幼稚園2,784人(86.7%)、小学校2,453人(89.2%)、
中学校1,040人(79.7%)
- (2)施設調査:保育所・幼稚園28施設(96.6%)、小学校10校(100%)、中学校5校(100%)

■ 調査のまとめ

○現在、何らかのアレルギー疾患があると回答のあった児は、園児約2割(21.8%)、小学生約3割(30.6%)、中学生3割強(35.6%)となっている。

○小児のアレルギー疾患は、年齢に応じて症状や原因が変化する「アレルギーマーチ」が一般的に指摘されているが、今回の調査結果からも、アレルギー疾患の年齢的な変化がうかがわれる。

○成長につれて罹患率が増加するアレルギー疾患や複数の疾患を合併する場合も多く、年齢に応じたアレルギー疾患の対応が異なる。

○また、多疾患に罹患している状況からも、複数の診療科での診療が必要となる場合が多く、医療提供側の理解や、かかりつけ医とアレルギー専門医や各診療科別専門医と連携し、総合的にアレルギー疾患患者の健康管理を支援していくことが重要となる。

○園・学校でアレルギー疾患のある児の受け入れは「食物アレルギー」が最も多く、園・学校で食事制限を必要とする割合は半数を占めている。

○誤食によるアナフィラキシー等健康被害の防止に向けて、集団生活の中で職員間の情報共有や対応の徹底が必要である。

○園・学校での把握と保護者の回答との間に多少の乖離がみられた。症状が軽い場合等、園・学校での対応を希望しない場合には、申告していないことも考えられる。

○食物アレルギーで、医師の診断を受けていない場合もあり、保護者の判断で不要な食事制限をしている可能性もある。特に中学生では、その割合が高くなる。

○栄養士職員の在籍が0人の園が42.9%あり、園での食事制限では「調理、調理献立が大変」との声も多く、現在の状況では、食物アレルギー児の対応に苦慮していることがわかった。

○エピペンへの対応体制について、園施設で「職員が使用できる体制がない」、「保管できない」との回答があった。園での体制が整っていないために使用できなければ、緊急時の対応としては不十分であり、全施設で、エピペンを適正に使用できる体制づくりが急務である。

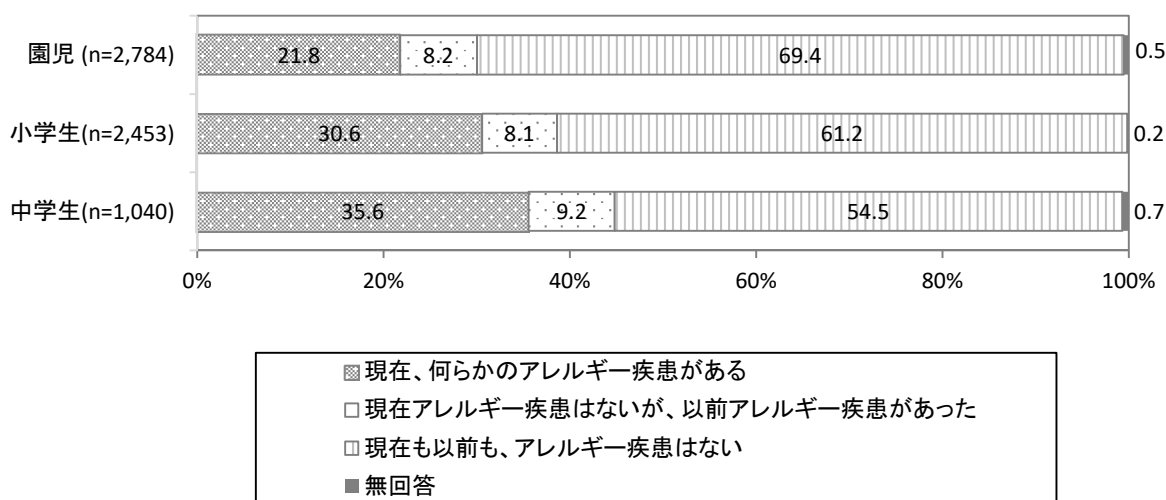
■ 保護者調査

1. 現在のアレルギー疾患の状態

現在、何らかのアレルギー疾患があると回答のあった児は、園児21.8%、小学生30.6%、中学生35.6%であった。

現在はないが以前アレルギー疾患があった児の回答も含めると、園児は約3割、小学生は約4割程度、中学生で4割強となっている。

年代別アレルギー疾患の状態

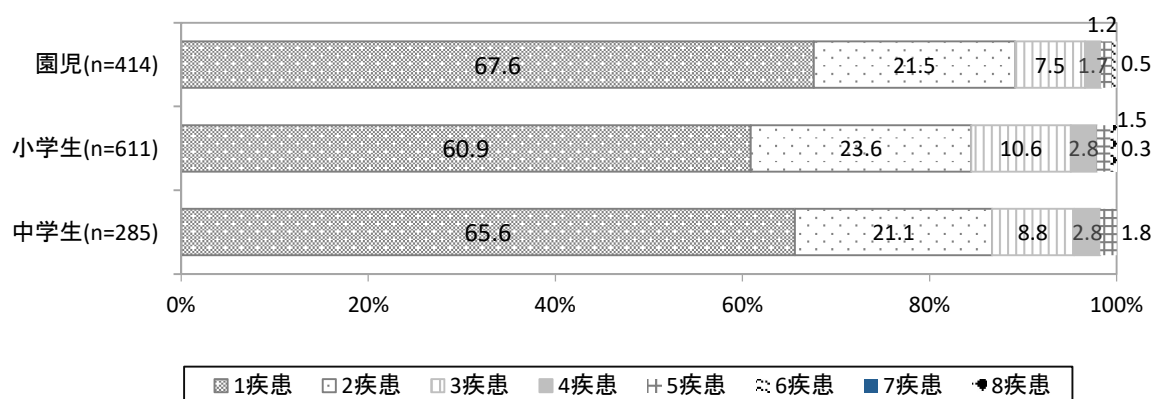


2. 現在、複数のアレルギー疾患を有する児の状況

現在、何らかのアレルギー疾患で医師の診断を受けており、複数のアレルギー疾患があると回答のあった児は、どの年代でも「1疾患」が多い。

なお、小学生では、調査対象の「8疾患」全ての項目で医師の診断を受けているという回答があった。

年代別・複数の疾患を有する割合



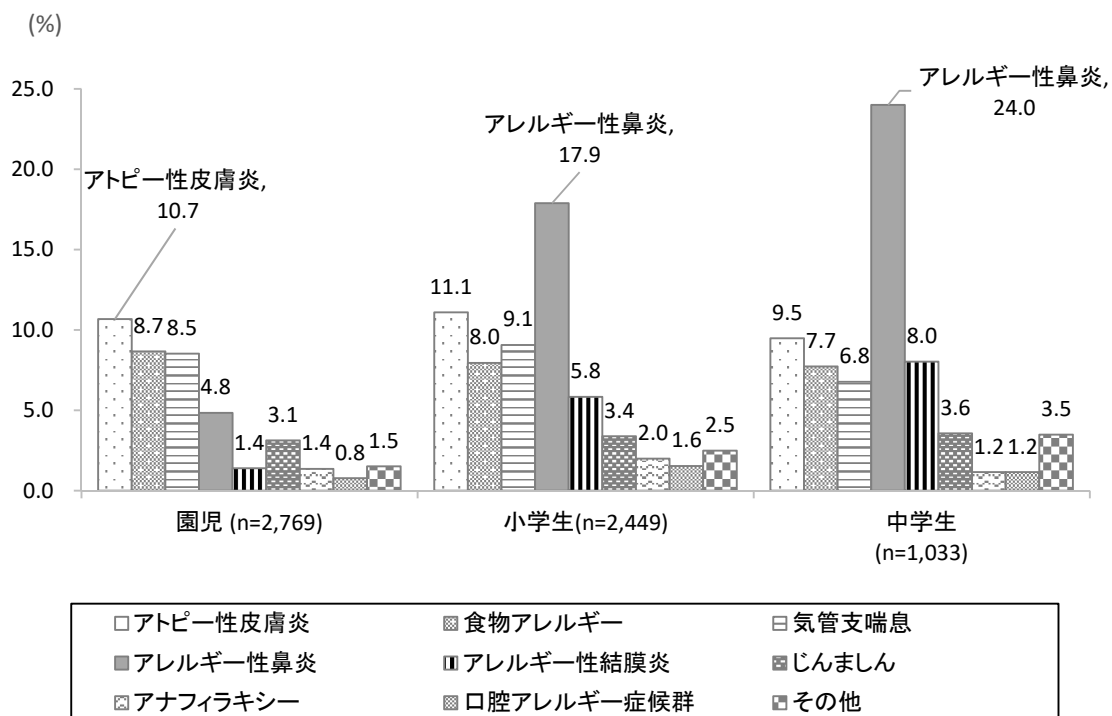
3. 現在のアレルギー疾患別のり患状況

現在のアレルギー疾患別のり患状況は、園児で「アトピー性皮膚炎」のり患が10.7%で最も多く、次いで「食物アレルギー」8.7%、「気管支喘息」8.5%の順であった。

小学生では、「アレルギー性鼻炎」が17.9%で最も多く、次いで「アトピー性皮膚炎」11.1%、「気管支喘息」9.1%の順であった。

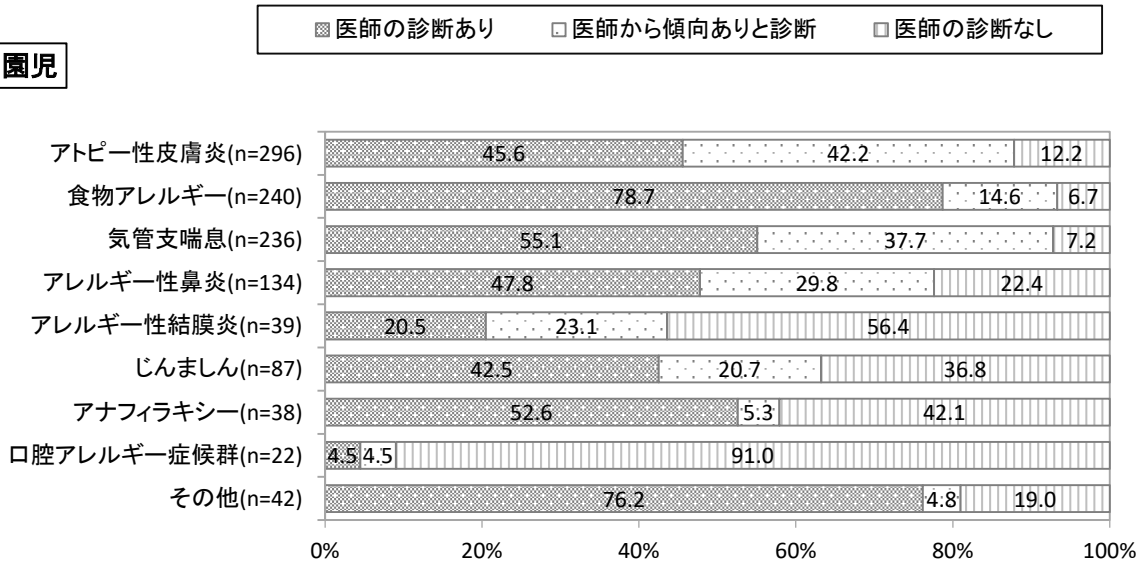
中学生では、「アレルギー性鼻炎」が24.0%で最も多く、次いで「アトピー性皮膚炎」9.5%、「アレルギー性結膜炎」8.0%の順であった。

年代別・アレルギー疾患別のり患状況

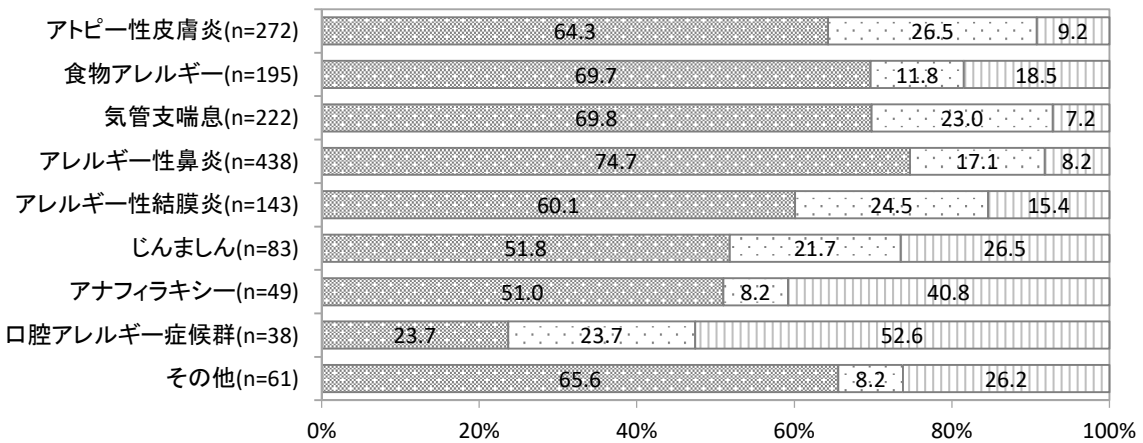


4. アレルギー疾患別の医師の診断状況

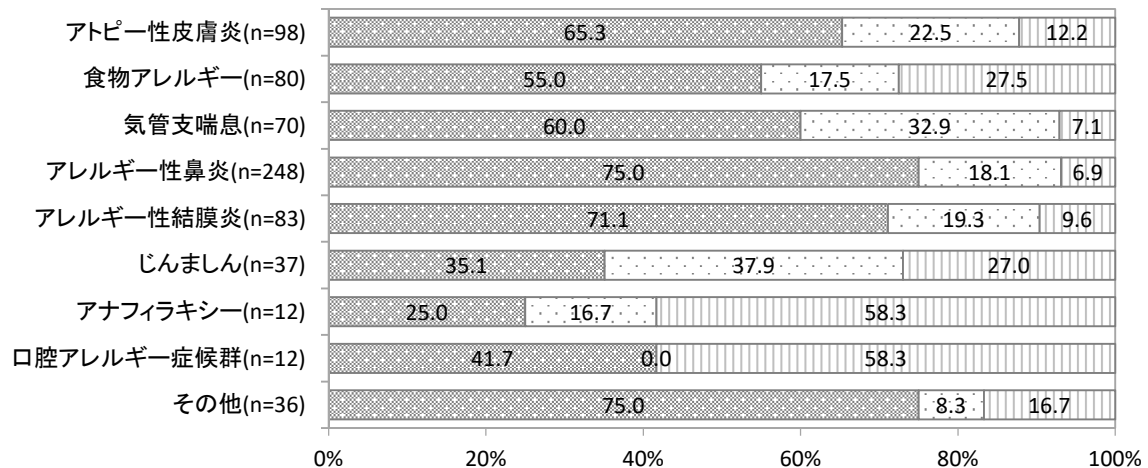
園児



小学生



中学生



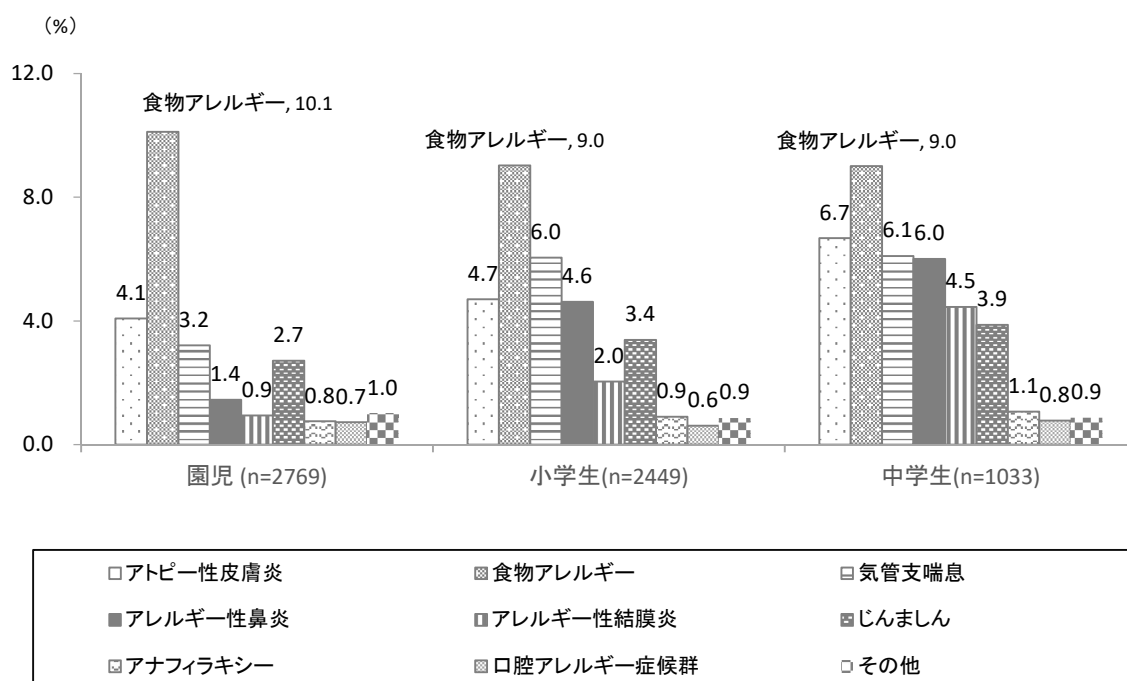
5. 今はないが、以前あったアレルギー疾患別のり患状況

今はないが以前あったアレルギー疾患のり患状況は、どの年代でも「食物アレルギー」が最も多かった。年代別では、園児で「食物アレルギー」が10.1%、次いで「アトピー性皮膚炎」4.1%、「気管支喘息」3.2%の順であった。

小学生では、「食物アレルギー」が9.0%、次いで「気管支喘息」6.0%、「アトピー性皮膚炎」4.7%の順であった。

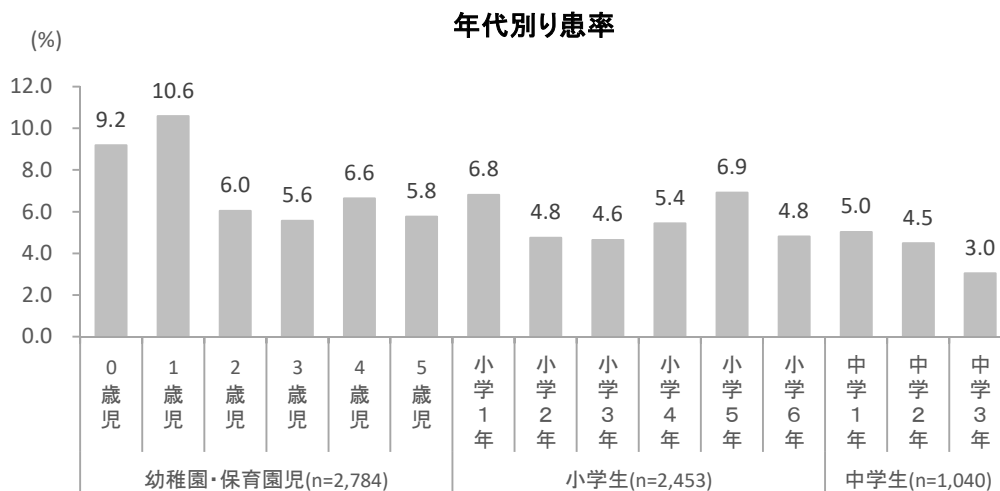
中学生では「食物アレルギー」が9.0%、次いで「アトピー性皮膚炎」6.7%、「気管支喘息」6.1%の順であった。

以前あったアレルギー疾患・年代別の状況



6. 食物アレルギーの年代別り患状況

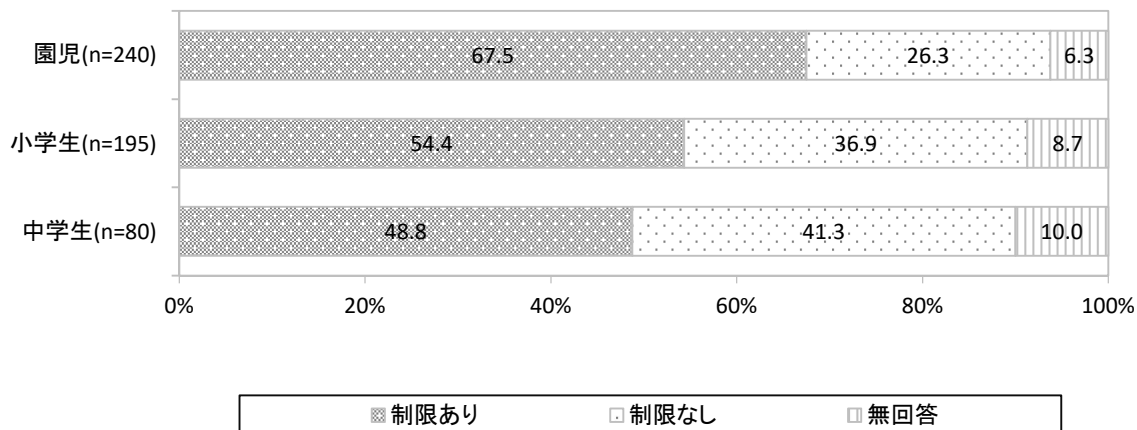
現在食物アレルギーがあり、医師の診断を受けていると回答があった児は、「1歳児」の割合が10.6%で最も多く、次いで「0歳児」9.2%、「小学5年(10歳児)」6.9%の順であった。



7. 食物アレルギーに対する食事制限

現在食物アレルギーがあり、園・学校での食事制限があると回答があった児は、園児が約7割(67.5%)、小学生は5割強(54.4%)、中学生は5割近く(48.8%)であった。

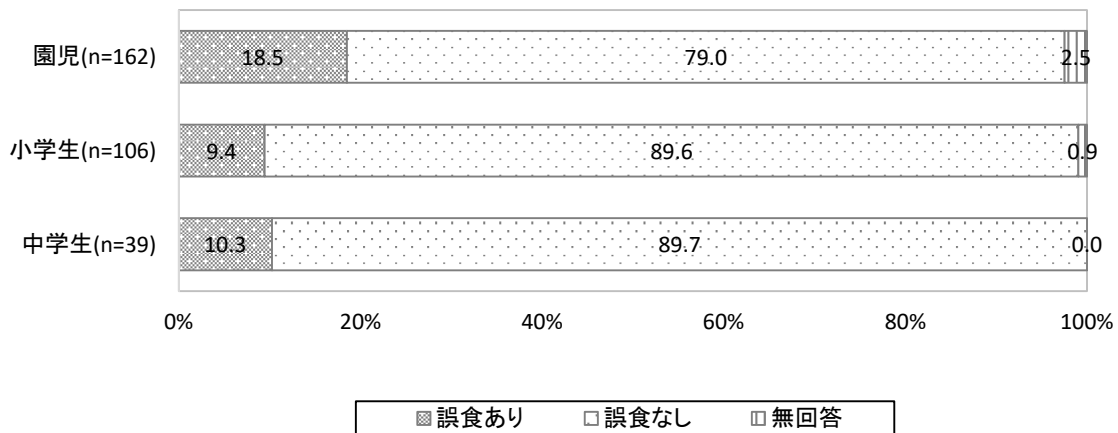
園・学校での食事制限の有無



8. 食物アレルギーがある児の誤食の状況

現在、食物アレルギーがあると回答のあった児のうち、「園・学校で食事制限があり、誤食があった」と回答があったのは、園児が18.5%、小学生9.4%、中学生10.3%であった。

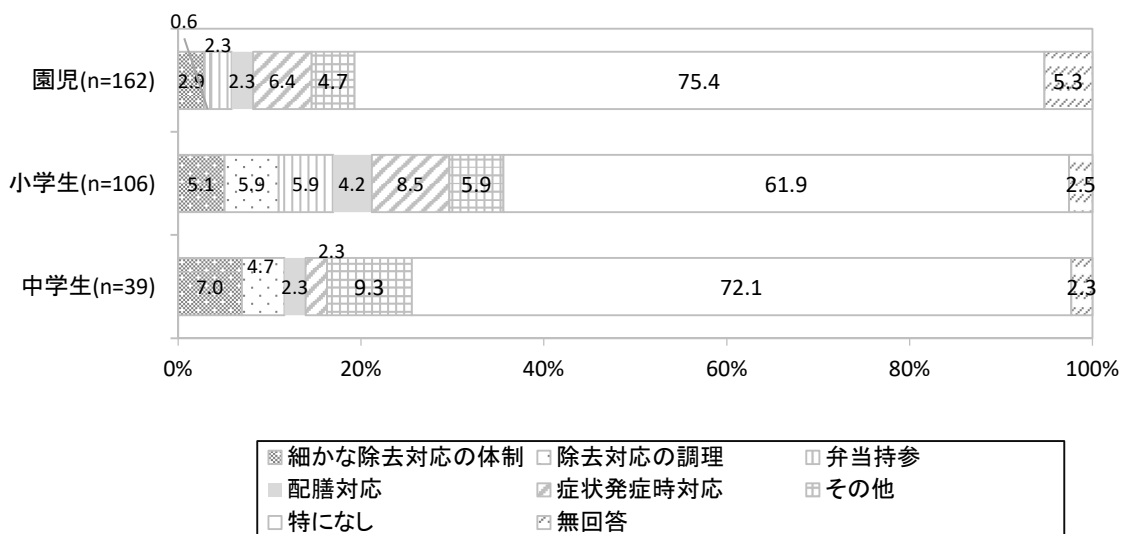
園・学校での誤食状況



9. 食物アレルギーがある児の園・学校の対応で困っていることや心配なこと

現在、食物アレルギーがあり、園・学校での食事制限があると回答のあった児の園・学校の対応で困っていることは、園児6.4%、小学生8.5%では「症状発症時の対応について」、中学生では「細かな除去対応の体制がない」が7.0%であった。

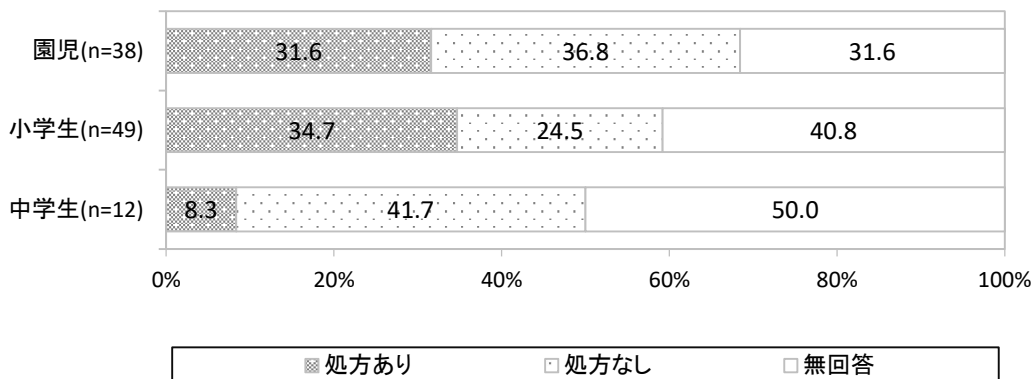
園・学校での対応で困っていること、心配なこと



10. アナフィラキシーがある児のエピペンの処方状況

アナフィラキシーがあり、エピペンを処方してもらっている児は、園児31.6%、小学生34.7%、中学生8.3%であった。

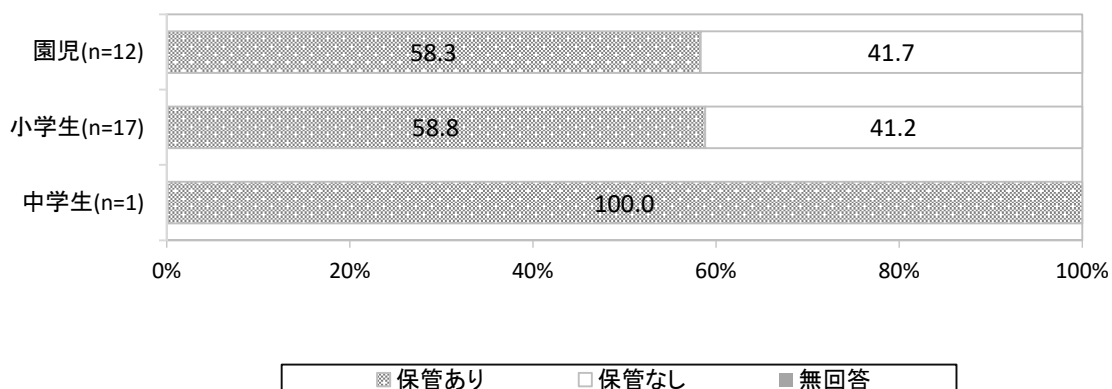
エピペン処方の有無



11. アナフィラキシーでエピペンを処方されている児の園・学校の保管状況

アナフィラキシーで医療機関からエピペンを処方してもらい園・学校での保管をしている児の状況は、園児58.6%、小学生58.8%、中学生100%であった。

園、学校でのエピペンの保管状況



12. 園・学校でのエピペンの使用状況

アナフィラキシーでエピペンの処方がある児の園・学校での使用状況は、「使用があった」と回答があったのは、園児のみであった。

また、園では、「職員等が使用できる体制がない(使用できない)」の回答があった。

園・学校でのエピペン使用状況



■ 使用があった

□ 今まではないが、必要な時には使用できる体制はある

■ 職員等が使用できる体制がない(使用できない)

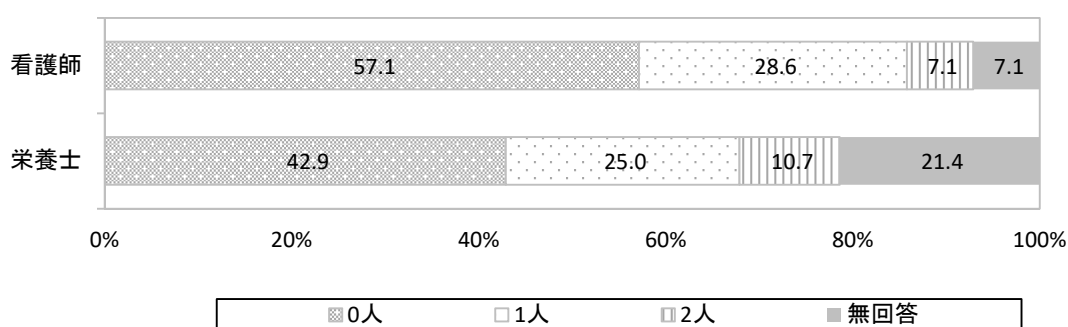
■ 施設調査

1. 園における看護師、栄養士職員の在籍状況

「看護師」の資格をもつ職員は、1施設あたり「1人」が28.6%で、看護師不在の施設は57.1%であった。

「栄養士」の資格をもつ職員は、1施設あたり「1人」が25.0%で、栄養士不在の施設は42.9%であった。

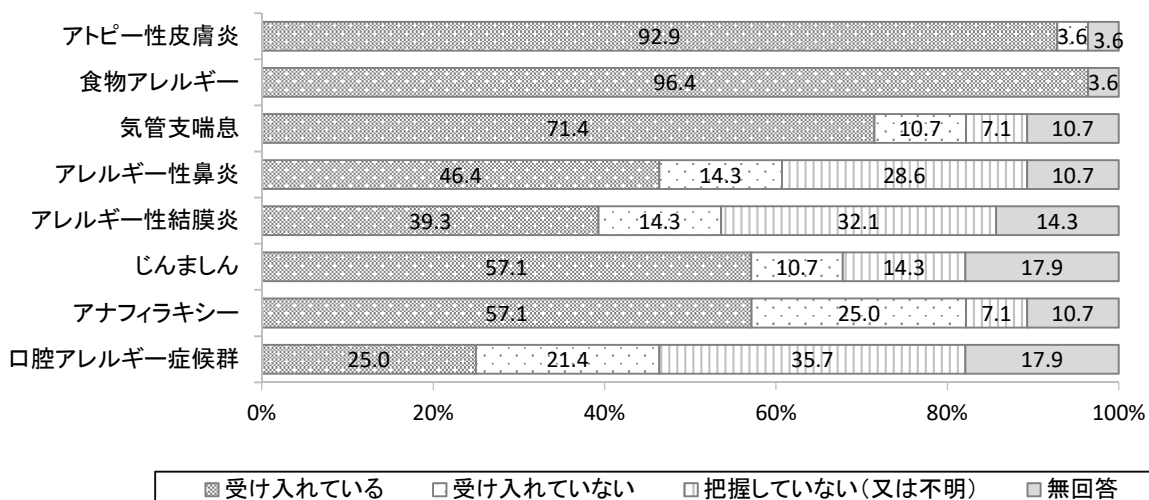
看護師、栄養士職員の在籍状況



2. 園におけるアレルギー疾患児の在籍状況

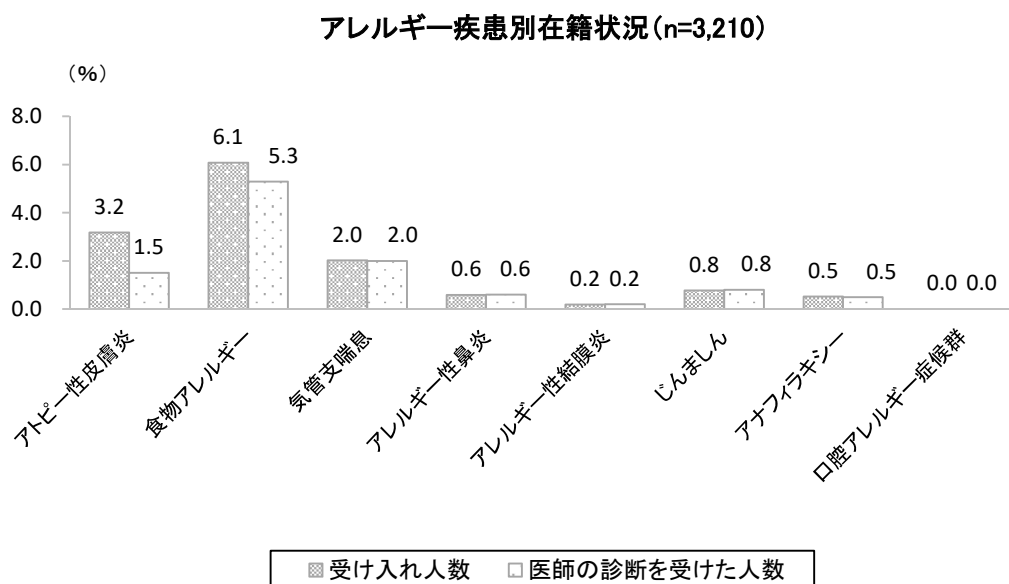
アレルギー疾患児の受け入れ状況は、「食物アレルギー」が96.4%で最も多く、次いで「アトピー性皮膚炎」92.9%、「気管支喘息」71.4%の順であった。

アレルギー疾患別在籍状況 (n=28)



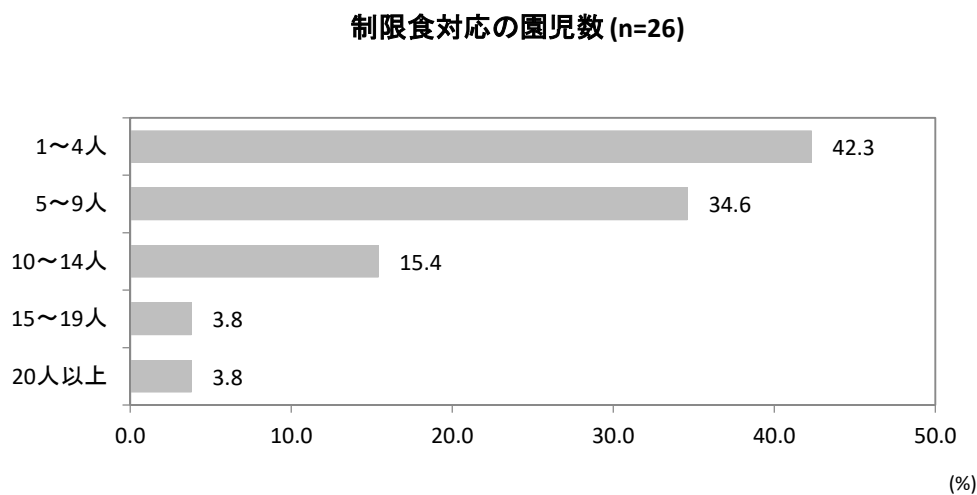
3. 園におけるアレルギー疾患のある児の在籍状況

アレルギー疾患児の在籍状況は、「食物アレルギー」が6.1%で最も多かった。そのうち、「気管支喘息」、「アレルギー性鼻炎」、「アレルギー性結膜炎」、「じんましん」、「アナフィラキシー」が同数で、全員が医師の診断を受けていた。



4. 園における食物アレルギー児の園での制限食の対応状況

食物アレルギーで医療機関の診断を受け食事制限の対応をしている児は、1施設あたりで「1～4人」が42.3%で最も多く、「20人以上」の食物アレルギー児が在籍する施設もあった。

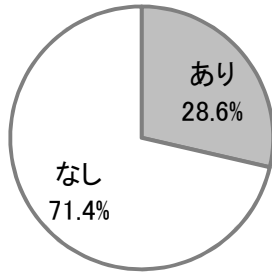


5. 園における食物アレルギー児の誤食状況

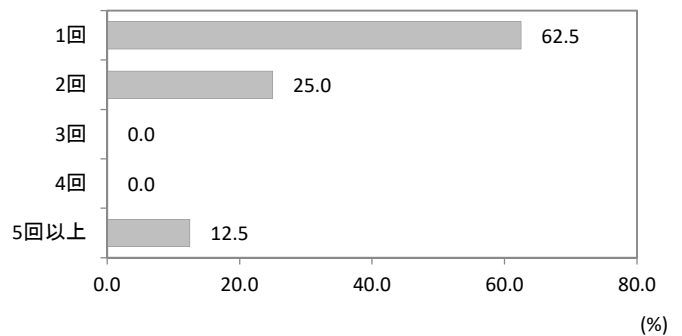
過去1年間(H28.4.1 ~H29.3.31)に誤食があった園は、約3割(8施設)であった。

誤食があった園での発生回数は、1施設あたり「1回」が6割強で最も高く、「5回以上発生した」園もあった。

食物アレルギー誤食の有無(n=28)



誤食があった園の発生回数(n=8)

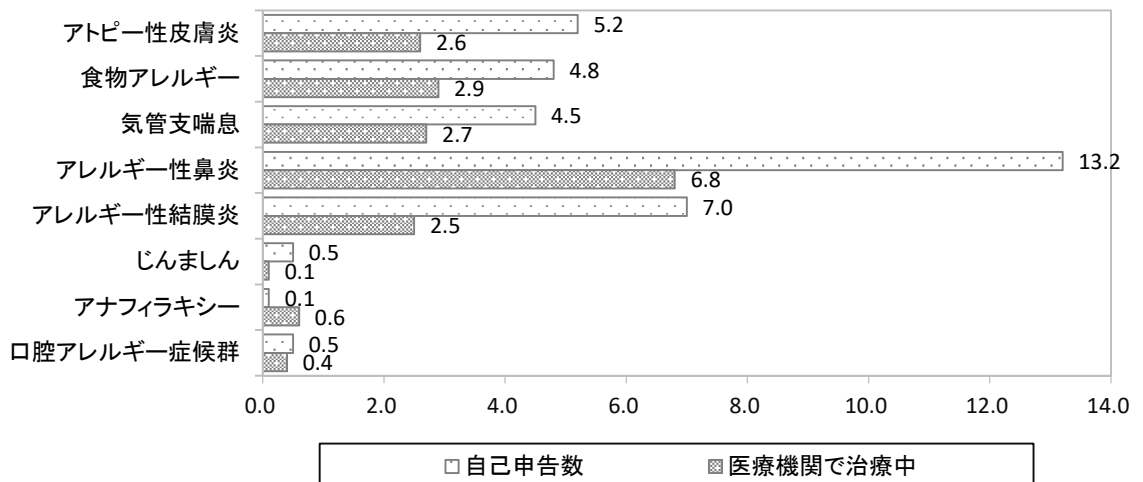


6. 小学校におけるアレルギー疾患のある児童の在籍状況

健康調査などによる自己申告でアレルギー疾患があると回答があったのは、「アレルギー性鼻炎」が13.2%で最も多く、次いで「アレルギー性結膜炎」7.0%、「アトピー性皮膚炎」5.2%の順であった。

医療機関で治療中や管理指導中と回答があったのは、「アレルギー性鼻炎」6.8%、次いで「食物アレルギー」2.9%、「気管支喘息」2.7%の順であった。

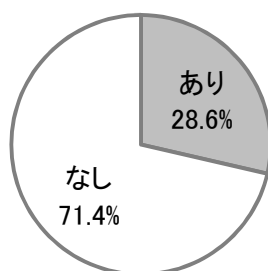
アレルギー疾患児童のり患状況(n=2,750)



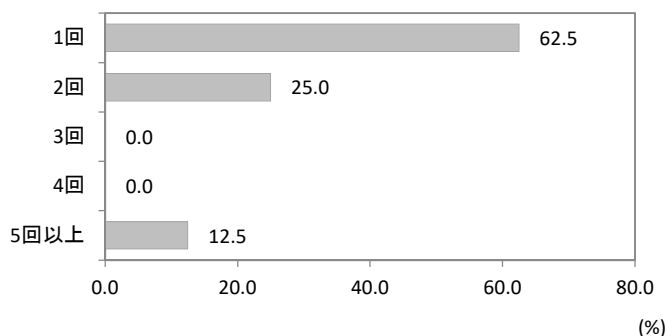
7. 小学校における食物アレルギー児の誤食状況

過去1年間(H28.4.1～H29.3.31)に誤食があった学校は、2割(2校)であった。
誤食があった学校での発生回数は、1校あたり「1回」だった。

食物アレルギー誤食の有無(n=28)



誤食があった学校の発生回数(n=8)



8. 中学校におけるアレルギー疾患のある生徒の在籍状況

健康調査などによる自己申告でアレルギー疾患があると回答があった疾患は、「アレルギー性鼻炎」が10.6%で最も多く、次いで「アレルギー性結膜炎」8.0%、「食物アレルギー」6.1%の順であった。

医療機関で治療中や管理指導中と回答があったのは、「アレルギー性鼻炎」が11.9%で最も多く、次いで「アレルギー性結膜炎」4.6%、「気管支喘息」3.4%の順であった。

アレルギー疾患生徒のり患状況(n=1,305)

